

『慶陵』の契丹文字接尾語表について

吉池孝一

1. はじめに

田村實造・小林行雄著『慶陵』(京都大學文學部 座右寶刊行会。1953年3月刊行)の上巻末尾に「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)」および「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(2)」と銘打たれた二枚の表(以下「接尾語表」(1)(2)と呼ぶ)が、『慶陵』本体とは別刷りとなって折り込まれている。この「接尾語表」につき、『KOTONOHA』98号において次のように述べた¹。

この表には「小林行雄・山崎忠・長田夏樹作製」とあるから小林・山崎・長田1953と呼ぶべきであろう。小林・山崎・長田1953は現在においても有用な部分を含むもので、この表の成立の経緯及び表自体が示す内容については別途検討されなければならない。

この言につき、「現在においても有用な部分を含む」とはどのようなことかとのご質問をいただいた。表の構成よりみて幾つかそのように感ぜられる部分があったため、このように述べたわけであるが、具体的なことについては今後順次検討し提示をしていきたい。今回の小論はそのための準備という性格のものである。

さて、この「接尾語表」は不思議な作品である。考古学の小林行雄氏、蒙古語学の山崎忠氏、契丹・女真語および広く一般言語学に通じた長田夏樹氏の名を冠した成果であるが、三氏の関与がどのようなものであったか明瞭でなく、著者による表についての詳しい説明も欠いているため評価することが困難である。そういうこともあっての故であろうか、『慶陵』は恩賜賞の対象となったけれども、この表については中国の契丹文字研究グループが言及するまでは埋もれたままの状態にあったように見える²。そこで今回は「接尾語表」の内容を知るための序章として表中の属格語尾に焦点を当て、その音価の推定がどのように行われたかということにつき検討した。その結果以下に挙げる幾つかの観点を得た。本来ならば検討の後に記すものであるが、内容が多岐にわたるため理解の便宜を考慮して先に紹介することとした次第である。

1. 長田夏樹氏と山崎忠氏とが中心となって作業が進められ、それに小林行雄氏が係わって、短日月の間に「接尾語表」ができたようである。下に挙げた5のように、音価の

¹ 吉池2011の注8。

² 早くは契丹文字研究小組1977がある。

推定にあたりモンゴル語(土族語)を参照した部分があるとすると、推定音価には長田氏の考えが強く反映している可能性のあることを考慮しなければならない。長田氏は当時、契丹語はモンゴル語に近似するとの立場にあった。

2. 推定音価に対する態度において、『慶陵』本文(田村・小林 1953)と「接尾語表」の説明(小林・山崎・長田 1953)との間には相違する部分がある。後者からは、仮に定めた音価という慎重なニュアンスのあることを見て取ることができる。
3. 「接尾語表」の第一番目の原字 140(契丹文字は清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985の文字番号による)が属格語尾であることは間違いなく、そのことは著者も表の作製に先立って知っていたはずである。この確実な例を座標軸として表の最初に置き、この語尾が付されたものを名詞語幹あるいは名詞的語幹として配置し「接尾語表」ができあがっている、とこの表を概括することができる。
4. 「接尾語表」は、原字 18(=140)を属格語尾と想定する厲鼎燿 1932 の説を、語幹と接尾語の表によって確認し比較的穏当な音価を提示した。これは契丹文字研究における貢献の一つである。
5. 契丹語の属格語尾の音価を推定するに際して、村山 1951 の原字 140 の推定音価および A. de. Smedt-A. Mostaert 1945 のモンゴル語(土族語)の属格語尾の音の両者を参照し、音価 ni を付したと想定して矛盾はない。
6. 長田 1951(12月)は、村山 1951(3月)の突厥文字依拠説を批判したけれども、「接尾語表」の音価推定に際して、村山 1951 の音価を参照した可能性がある。村山 1951 は突厥文字と契丹文字を結びつけようとした論文であるが、音価推定の根拠として契丹語と漢語との対音対訳資料も利用している。このような箇所には有効なものも含まれるとみたのであろう。そうであるならば今後「接尾語表」を検討する際には、村山 1951(3月)を資料として利用しなければならない。

以上 6 点である。第 2 節以降においてこの 6 点について検討の経緯を記す。まずは本表の成立の経緯を確認し、次いで表の構成を概観する。

2. 成立の経緯

いうまでもなく『慶陵』の著者は田村實造氏と小林行雄氏である。山崎忠氏と長田夏樹氏は『慶陵』本文中の「第四節 契丹文字の哀冊」の執筆協力者であり、「接尾語表」の執筆者である。このことは、「第四節 契丹文字の哀冊」に次のようにあることから状況の一端を知り得る。

なお、われわれが契丹文字の研究をここに述べた程度にまで進めることができたのは、中世蒙古語に深い造詣をもつ天理大學宗教文化研究所員山崎忠氏と、契丹文字の

研究に傾心しつつある神戸市外国語大学助教授長田夏樹氏の協力によるところが多い。とくに『元朝秘史』と『韃靼館譯語』の音節頻度の算出は、山崎氏の作成された資料カードによった。両氏の厚意に深く感謝するしだいである。(265頁)

ここに「われわれが契丹文字の研究を」と述べるところの「われわれ」とはいうまでもなく田村實造氏と小林行雄氏であり、山崎忠氏と長田夏樹氏はその協力者である。『慶陵』上巻末尾に挟みこまれた「接尾語表」(1)(2)については「小林行雄・山崎忠・長田夏樹作製」とあることより、独立した成果として小林行雄・山崎忠・長田夏樹 1953 と呼ぶべきであろう³。いますこし詳しい経緯については長田 1994 によって知ることができる。これは『慶陵』の著者の一人である小林行雄氏の追悼録に寄せた一文であり、題の「契丹文字の結んだ縁」のとおり長田氏が『慶陵』と係わりを持つに到った経緯を見て取ることができる。

その小林さんと対面の栄に浴したのは、一九五二年の秋であった。田村実造教授に呼ばれて訪れた京都大学の東洋史研究室に小林さんもおられたのである。その頃、田村教授と小林さんは、一九三九年に調査した慶陵の報告をまとめておられて、契丹文字のことにについて聞きたいというのが、私が呼ばれた理由であった。というのもその前年に勤務先の大学の雑誌に「契丹文字解読の可能性」なる小稿を発表していたからである。これは同年に盟友山崎忠氏が発表した「甲種本華夷訳語の音訳漢字の研究」の方法論と同じく、ウイグル文字やモンゴル文字がその位置によって語頭・語中・語末・独立系と形を変えるという特色から帰納した方法を展開したものであった。山崎バクシは漢字で表記してあるモンゴル語音節が頭・中・末・独立の位置にそれぞれいかに現われるか出度表を作っていた。小稿も期せずして同じくこの方法を契丹文字に活用し、詞頭・詞中・詞尾・単独に分けて出度表を作っていたのである。その際、資料としては、宣懿皇后哀冊のみを使用した。と言うのは、興宗と仁懿皇后の哀冊は原拓を見ることができなかつたし、道宗哀冊には改刻の跡があるためであった。

初対面の挨拶もそこそこに、席につくやいなや、私の論文を手にした小林さんは「この出度表の二一五・二〇八の二字は、詞中とあるべきを詞尾と誤って書き入れてあるのではないですか」という意味の妥当な指摘をされた。実は、小林さんは道宗哀冊の重刻部分を原刻と改刻に分けて、その原刻・改刻にある契丹文字を頭・中・尾・単に分けた表を作っておられたのである。弥生土器の編年を作れる技術をもってすれば碑文の重刻を分離するなどわけないことを知り、「うーん、できる人がいるもんだなあ」と、正直

³ 『長田夏樹先生追悼集』(2011年)に収められた「長田夏樹著作目録」〈学術論文〉(240頁)の20に「「接尾語として用いられた契丹文字の類別表」(共著), 『慶陵 I (本文冊)』256-270頁, 京都大学, 1953年3月。*共著者: 小林行雄、山崎忠」とある。「256-270頁」は、『慶陵』本文「第四節 契丹文字の哀冊」の頁数である。これを仮に「接尾語表」(1)(2)の頁数として付したものの。この表自体に頁数は振られていない。

言って感服した。その場で、一も二もなく「契丹文字の哀冊」の節について及ばずながら協力を約束するとともに、協力者として山崎バクシの名を挙げて帰神したのであった。

ほどなく、山崎バクシと私は京都に呼ばれて、百万遍にある寺を宿舎にして、研究合宿と言うことにあいなった。バクシとは大陸の張家口時代からの友人であったし、三十をすこし越えた若さであったので、この合宿は大いに愉快であった。しこたま飲み論じ机にむかい晩秋の京の底冷えもものかは時の経つのも忘れる程であった。痛飲して寝こんだ夜半に、突然山崎バクシがはね起きて、「解けた！」と、叫んだ姿は今も眼底から離れない。(96-97 頁)

これによると東洋史の田村實造氏と考古学の小林行雄氏は慶陵の契丹文字・契丹語部分の報告をまとめるに際して協力者を求めており、長田夏樹氏に白羽の矢が立ったと理解してよいのであろう。その契機となったものが長田 1951(12 月)の論文である。もっともこの論文に先立ち村山 1951(3 月)があった。これは契丹文字の字形と音価が突厥文字の字形と音価によったとする説である。長田 1951(12 月)はこの突厥文字依拠説への反論であり、これによって契丹文字(小字)⁴の解読は正しい方向に軌道修正された⁵。さて村山 1951(3 月)がでると、慶陵の調査をまとめていた田村實造氏は、田村 1951(8 月)において、村山 1951(3 月)について次のように述べた。

・・・などの諸論文が相ついで発表されていることから明らかであろう。筆者もこれらの人々の驥尾に附しつつあったが、われわれの帰納しえたところは、契丹語はおそらくモンゴル語—これは陵墓内の像画からも推測されえたが—であろうこと。契丹の一語は若干個の原字(アルファベット)より合成されていることが篆蓋の隸書体文字

⁴ 契丹文字には大字と小字の二種がある。大小字の認識の経緯については吉池 2010 にある。

⁵ 長田 1951(12 月)は村山 1951(3 月)の突厥文字依拠説を以下の三点より批判した。

- 一、史書所載の契丹語は蒙古文語と明確に異なる特徴を示しているが、村山 1951 によって解読されたとする契丹語は蒙古文語的に過ぎる。
- 二、約 40 字の突厥文字と 200 字に余る契丹文字構成要素を比較したため音価の同じ文字が何らの条件も伴わずに異なった幾つかの形であらわれるという結論となった。
- 三、左から右としか読み得ない文字を右から左に読んだ。

これらの批判によって、少なくとも、突厥文字より字形を借りたという意味では突厥文字依拠説はその成立の根拠を失った。

字形と音価を突厥文字によったとする説の成立は困難であるが、最近では、子音と母音の表記の仕方において契丹小字は突厥文字の影響を受けたのではないかとの説が呉英喆 2007 より提出されている。すなわち、ふつう s, pu, ir などと音価が推定されている契丹小字の原字は、契丹語において[sə]と[es]、[bu]と[ab]、[ir]と[ri]のように両用の読み方が為されるという。子音の前後に母音を付加して読む言語事実の指摘は興味深いことであるが、これを突厥文字との関連においてとらえ得るかという点についてはなお検討を要するようにおもう。このような意味で突厥文字の影響を受けたとする説は、早くは王弘力 1986 にみえる。子音の前後に母音を付加して読むという言語事実の指摘は、早くは清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985 の 110-111 頁にみえる。

と哀冊本文の楷書体文字との照合から確認されること。したがって契丹文字は大部分が綴音文字であること。その原字は少くとも約 220～230 個はあること。原字は音字のほか意字も多少あること。原字の合成法は 2 個の時は上より下へ、3 個の時は左より右へ、ついで下へ、4 個の時は左から右へ、ついで左下より右下へ、5 個の時は 4 個の下に 1 個を加えるという順序である。所有格を示す文字が抽出しえられること。などであった。他の人々の考えも大同小異であったであろう。ただそれらの中にあつて、前記遼陵石刻集録中にのせた羅福成氏推定の契・漢の逐語的置きかえ・・・略・・・が、ただ一つの手がかりを提供するものであった。しかしこれとても、暗中模索にすぎないもので科学的立場から契丹文字を解読したものではなかった。ところが本年 3 月(1951 年)村山七郎氏は、日本言語学会の機関誌、言語研究(第 17, 18 合併号)に「契丹文字解読の方法」という一文を発表することによって、遂にこの難問を解決することに一光明を見出した。・・・契丹原字を突厥文字と比較対照して、遂に解読へのキイを発見したのである。(48 頁)

田村 1951(8 月)は村山 1951(3 月)の突厥文字依拠説を支持している。そういうわけであるから、もしも長田 1951(12 月)が出なかったならば、また田村・小林氏が長田 1951(12 月)に注目しなかったならば、『慶陵』「第四節 契丹文字の哀冊」の記述はよほど今とは異なるものとなっていたであろう。

さて長田 1994 によると、その長田氏が協力者として山崎氏の名をあげ、1952 年の秋に共同作業を始めたということである。長田礼子 2011「長田夏樹年譜」には次のようにある。

1952 (昭和 27) 年

10 月 京大の田村実造氏と小林行雄氏に呼ばれ、天理大学の山崎忠氏と一緒に慶陵出土の契丹文字を記載した表を作成する。(348 頁)

この共同作業の成果が、『慶陵』「第四節 契丹文字の哀冊」の記述と「接尾語表」として結実したわけである。附表として本体に折り込まれた「接尾語表」が長田氏と山崎氏の共同作業の成果であるとして、それに小林行雄氏がどのように係わったかということについては必ずしも明瞭ではないが、坪井 2011 には次のようにある。

その最終段階に小林行雄氏が三代の皇帝、皇后の哀冊から契丹語の解読を試み、長田さんと天理大学の山崎忠さんとに協力を御願されました。山崎さんは『元朝秘史』の全文数万字を小さな紙に一字ずつ書き込んだ資料をリュックいっぱい詰めて数回にわたって京都に持ってこられ、三人で哀冊の契丹文字を比較して契丹語を解明する研究をしておりました。(279 頁)⁶

⁶ 共同作業の様子は長田 1994 に描かれているが、そのほかには坪井 2011 がある。これは『長田夏樹先生追悼集』(2011 年)に収められた追悼文である。関係部分を引くと次のとおり。

以上を要するに、長田夏樹氏と山崎忠氏とが中心となって作業が進められ、それに小林行雄氏が係わって短日月の間に「接尾語表」ができたらしいということである。

3. 「接尾語表」の概観

『慶陵』に附された「接尾語表」は、契丹小字で綴られた契丹語の語幹と接尾辞即ち「接尾語」を提示し、接尾語の幾つかについて音価を付したものである。契丹小字は文字成分である「原字」⁷をハングルのように左右上下に組み合わせて単語を表記するわけであるが、単語中の変化しない部分を語幹、変化する部分を接尾語と想定して単語を配列したものがこの「接尾語表」である。「接尾語表」(1)の右下には次の説明がある。

本表は慶陵出土の四種の契丹字哀冊中より、契丹字契丹語の名詞曲用語尾、形容詞語尾、動詞語尾等の主要なるものを摘出して、分類表示したものである。ただし類例の豊富でないものは省略した。各字の出典は、興宗哀冊文 A, 仁懿皇后哀冊文 B, 道宗哀冊文 C, 宣懿皇后哀冊文 D なる略號をもつて、各字の下に示した。なお表末に参考のため附記した契丹字接尾語の音値は、中世蒙古語との比較によつて比定した形態論上の音値である。(小林行雄・山崎忠・長田夏樹作製)

この説明によると中世蒙古語と比較して契丹原字の音価を推定したとあるが、具体的にどのような手順を踏んで推定に至ったかということについては不明である。これ以上のことは『慶陵』本文中の「第四節 契丹文字の哀冊」の記述および「接尾語表」自体が示す内容によって推察するしかない。

まず「接尾語表」の構成を確認する。いま仮に語幹の原字を FG, HI, JK, OP などの記号で、接尾語を α , β , $\kappa\lambda$ などの記号で代替して、その概観を示すと図表 1 となる。なお図表 1 は「接尾語表」の理解のために提示した便宜的なものであり、数字や単語の配置は実際の表に対応したものではない。

「1952 (昭和 27) 年、私は京都大学東洋史学科田村実造先生と考古学教室助手であった小林行雄氏が 1939 (昭和 14) 年に調査された、内蒙古遼代皇帝陵『慶陵』の報告書編集のお手伝いをしていました。その最終段階に小林行雄氏が三代の皇帝、皇后の哀冊から契丹語の解読を試み、長田さんと天理大学の山崎忠さんとに協力を御願されました。山崎さんは『元朝秘史』の全文数万字を小さな紙に一字ずつ書き込んだ資料をリュックいっぱい詰めて数回にわたって京都に持ってこられ、三人で哀冊の契丹文字を比較して契丹語を解明する研究をしていました。契丹語は表意文字と表音文字からなっており、一語が一音から最大九音を合わせたものまであり、韓国のハングルが一単位から三単位までを組み合わせると似たことで、契丹語は接頭辞、接尾辞を含めて一文字にしたもので、元朝秘史に書かれた古代東蒙古語と似た言語であったろうとされ、その音価を復元するチャートを報告書に発表されました。この報告書は恩賜賞を下賜されましたが、契丹語の訳読は言語学会では評価されませんでした。」(279 頁)。

⁷ 白鳥 1898、長田 1951 は「元字」と称する。田村 1951、田村・小林 1953 は「原字」と称する。契丹文字研究小組 1977 をはじめとして中国の研究者は「原字」とする。

	7	4	3	2	1	
	OP . . . 【略】 . . . JK			FG		一
	OP JK		HI	FG	α	二
	α	α	α	α		
	OP JK		HI	FG	β	三
	β	β	β	β		
					.	.
					【略】	.
					.	.
	OP JK		HI	FG	$\kappa \lambda$	七
	$\mu \lambda$	$\kappa \lambda$	$\kappa \lambda$	$\kappa \lambda$		

図表 1

一段目に FG や JK や OP などの語幹が、1 行目に α や β や $\kappa \lambda$ などの接尾語が並んでいる。この両者を組み合わせた FG α を契丹語の一単位とし、それらを配列して表ができあがっている。一段目の 3 は空白であるが、これは HI という語幹のみの語がないことを示す。こうして得られた変化する部分、すなわち α や β や $\kappa \lambda$ を契丹語の接尾語と見なすわけである。なお、七段目の接尾語の見出しは $\kappa \lambda$ であるが、7 行目の $\mu \lambda$ のように一部の原字が入れ替わっていることもある。このような場合の原字 κ と μ の関係について特段の説明はない。

つぎに接尾語のみを列挙する。図表 1 で α や β や $\kappa \lambda$ として便宜的に示した接尾語を、清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985 (以下、清格爾泰等 1985 と略称する) 中の契丹文字原字の文字番号で示し、音価が付されているものはその音価とともに示すと図表 2 となる。参考のため清格爾泰等 1985 で推定された音価をならべて示す。その場合、「接尾語表」の音価/清格爾泰等 1985 の音価、とする。なお、清格爾泰等 1985 は広母音を α とするが、 a と実質的な違いはないので両者を区別せず a とする。子音の表記法であるが、「接尾語表」は有声子音の系列を d, g, b など、無声子音の系列を t, k, p などとするが、清格爾泰等 1985 は前者を t, k, p など、後者を t', k', p' などとする。清格爾泰等 1985 で疑問の印?が付されたものは要検討の音価である。

1. 140 ni / ən
2. 222 nu / nə

3. 341 du / uei
4. 33 音価無し / is
5. 254 da / t
6. 244 ka / s
7. 205 yi / tə
8. 361 yan / ʃu?
9. 339 ca / i
10. 144 ŋ / ta
11. 288 tan / pən
12. 311-144 ta-ŋ / p-ta
13. 311-222 ta-nu / p-nə
14. 349-341 l-du / kə-uei
15. 349-361 l-yan / kə-ʃu?
16. 349-144 l-(u-)ŋ / kə-ta
17. 349-20 l-ga / kə-i
18. 349-76 音価無し / kə-xun
19. 131-153 da-sun / u-ku
20. 131-153-140 da-sun-ni / u-ku-ən
21. 261-334 la-ku / l-k
22. 261-334-140 la-ku-ni / l-k-ən
23. 261-151 la-ba / l-v
24. 261-151-11 la-ba-su / l-v-an
25. 123 ju / 音価無し
26. 189-123 ga-ju / a-音価無し
27. 189-290 ga-cu / a-ʃu?
28. 189-81 ga-sa(C) / a-ue
29. 51-123 ǵul-ju / va-音価無し
30. 51-189-123 ǵul-ga-ju / va-a-音価無し
31. 51-189-290 ǵul-ga-cu / va-a-ʃu?
32. 51-189-81 ǵul-ga-sa(C) / va-a-ue
33. 261-51-123 la-ǵul-ju / l-va-音価無し
34. 261-51-189-123 la-ǵul-ga-ju / l-va-a-音価無し
35. 261-51-189-290 la-ǵul-ga-cu / l-va-a-ʃu?

36. 311-356 音価無し / p-音価無し
 37. 272-131 音価無し / 音価無し-u
 38. 272-131-273 音価無し / 音価無し-u-un
 39. 272-131-153 音価無し / 音価無し-u-ku
 40. 11 音価無し / an
 41. 99 音価無し / 音価無し
 42. 348 音価無し / ue
 43. 348-162 音価無し / ue-ŋʰ
 44. 262 音価無し / uei
 45. 97 音価無し / uan
 46. 97-339 音価無し / uan-i
 47. 186-322 音価無し / o-音価無し
 48. 186-76 音価無し / o-xun

図表 2

このような語幹と接尾語の一覧表は、未解読文字を解読するばあい、少なからぬ便宜をもたらすはずであるが実際にどのように利用されたかということについて詳しいことはよくわからない。もっとも、「接尾語表」の公表より数えて 24 年後に契丹小字解読における画期的な成果である契丹文字研究小組 1977 が出たわけであるが、少なくとも「接尾語表」は、契丹文字研究小組 1977 中の語幹と付加成分の一覧表につながることだけは確かである⁸。

以上、「接尾語表」の成立の経緯を確認し表の構成を概観した。次節以降において、上掲の図表 2 の「1. 140 ni / ən」を検討することによって、音価の推定がどのように行われたかということに迫ってみたい。

4. 属格語尾の認定

「接尾語表」では接尾語を抽出しそれに音価を付しているわけであるが、それぞれの接尾語がいかなる機能を持っていたかという説明は一切ない。機能を確定して初めて音価の推定も可能となる道理であるから、少なくとも音価を付した部分については機能も確定していたはずであるがその説明はなく、第三者は表の構成より推測する以外にないのである。しかしながら、一つだけ機能が明らかなものがある。表の第一番目の原字 140 であり、これが属格語尾であることは、下記のように『慶陵』本文中の「第四節 契丹文字の哀冊」

⁸ 契丹文字研究小組 1977 の 77-90 頁「(三)研究契丹文的語音語法規律，繼續擴大釋義及音讀範圍」が「接尾語表」に相当するものである。両者の比較対照は研究課題の一つとなる。

にある。なお引用文中の契丹文字の原字は清格爾泰等 1985 中の文字番号で代用する。

皇帝をあらわす 75・37 の二原字は、單獨で用いられるとともに、ときに後者の 37 は 37+140 の形で結合されているが(道宗哀冊第一行七字目)、これは 75・37+140 の二字で「皇帝の」の意味である。すなわち右側に結合された 140 は物主格 genitive case をあらわす表音文字であることがわかる。(263 頁)

このようなことは、『慶陵』(1953 年)の著者である田村實造氏が、既に田村 1951 において「所有格を示す文字が抽出しえられること」(48 頁)と指摘しているわけであるが、「接尾語表」の著者達の共通認識でもあったはずである。もっとも、原字 75・37(皇帝)の後に属格語尾が付されるという考えは、早くは厲鼎燿 1932 にみえる⁹。

- ・第一種【道宗哀冊】碑蓋中の 75, 37 の二字は、漢字の“主王”の二字に形が似ている。おそらく契丹語の“可汗”であろう。碑蓋以外には正文中に凡そ三語ある(第一行, 第五行, 第十五行)。読むものは一見して 37 の字は 18 の字と合字となっていることがわかるであろう。おそらくは語尾を付加したもので、虚字の“之”に相当する¹⁰。(571 頁)
- ・遼碑第二種【宣懿皇后哀冊】碑蓋中の 331, 348, 21 の三字を考えるに、皇后の意であろう。その下に付された 251 はまた語尾であり、第一碑【道宗哀冊】の 18 と同様である。こちらは女性【語の語尾】であり、あちらは男性【語の語尾】という違いがある¹¹。(571-572 頁)

上掲の二つの文献をみると属格語尾として、『慶陵』「第四節 契丹文字の哀冊」は 140 を挙げ、厲鼎燿 1932 は 18 を挙げるわけであるが、140 と 18 は同一の働きをもつと理解することができる。すなわち、漢語の「皇帝」に相当する契丹原字の 75・37 は道宗哀冊中の四箇所にある。①碑蓋 75・37・18、②第一行 75・37・140、③第五行 75・37、④第十五行

⁹ 長田夏樹 1984 は厲鼎燿 1932 の執筆年を 1933 年 11 月と考証する。未解読文字の解読において、重要な位置を占める論文が実際に何時書かれたかということは小さな問題ではなく、可能な限り正確を期さなければならないが、今は当該論文の奥付の発行年にしたがう。この厲鼎燿 1932 という文献は、清格爾泰等 1985 に「此文考証了《道宗哀冊》和《宣懿哀冊》中的部分契丹字，開釋讀契丹字之先聲。」(642 頁)との評があるように、契丹小字解読の先駆けと認識されているものである。時期が早いということだけでなく、その方法において特筆すべきものがある。初期の契丹文字研究は契丹文に漢語語彙を対応させることを主とするが、厲鼎燿 1932 は契丹文をアルタイ語の一種を表記したものと認識し文法成分を析出したわけであるから、これをもって契丹文字・契丹語の実質的な解読の始まりとすることができる。「接尾語表」が契丹文中の文法成分を確認し比較的穏当な音価を付したことは、契丹文字研究における貢献の一つである。

¹⁰ 「第一種碑蓋中之 75, 37 二字，形近華文“主王”二字者，蓋即契丹“可汗”字也，碑蓋而外，正文中凡三見，(第一行，第五行，第十五行，)讀者可一望而知；其 37 字或與 18 字合書，余以為乃加一語尾，等於虚字“之”者而已。」(571 頁)

¹¹ 「尋遼碑第二種蓋文之 331, 348, 21, 三字，即皇后之意，其下 251 字亦語尾，與第一碑之 18 相似，特此為女性，彼為男性，亦有不同耳。」(571-572 頁)

75・37 の四箇所である。その内、①碑蓋と②第一行の当該箇所は対応する同一文書であり、原字の 18 と 140 は同一の働きをもつと理解することができるのである。いずれにしても「接尾語表」の第一番目の原字 140 が属格語尾であることは間違いなく、そのことは著者も表の作製に先立って知っていたはずである。そして、この確実な例を座標軸として表の最初に置き、この語尾が付されたものを名詞語幹あるいは名詞的語幹として配置し「接尾語表」を作ったとこの表の性格を概括することができる。このように原字 140 が属格語尾であるとして次に問題となるのは、ni という音価の推定がどのようにして行われたかということである。次節では『慶陵』本文と「接尾語表」において言及されている音価推定の方法について確認する。

5. 音価推定法について

音価の推定法について『慶陵』本文中の「第四節 契丹文字の哀冊」には「契丹文字解讀の方法」という見出しのもとに次のようにある。

まず契丹語が中世蒙古語の一方言であるということが一應みとめられるものとすれば、中世蒙古語で書かれている文章、たとえば『元朝秘史』や甲種本華夷譯語『韃靼館譯語』文例の部の文章を構成する個々の單語を、さらに音節に分解した場合、そこに示される各音節の全文章中における出現率と、各語の語頭・語中・語尾にあらわれる頻度とは、契丹文における各音節の頻度と近似するものと考えられる。また中世蒙古語が漢字で表記された場合、各一語を表記する漢字の數と契丹語を構成する契丹原字の數とがほぼ一致するから、われわれは『元朝秘史』および甲種本『韃靼館譯語』の各音節頻度表と、興宗・仁懿皇后・道宗・宣懿皇后の四哀冊文にみえる契丹原字の頻度表とを比較對照するとともに、別表にかかげた契丹語接尾語と、中世蒙古語の接尾語を照合して、すでに數十個の契丹原字の音価を推定することができた。(265 頁)

ここで「別表にかかげた契丹語接尾語」と言うところの「別表」とは「接尾語表」のことであり、「すでに數十個の契丹原字の音価を推定することができた。」と言うところの推定音価は「接尾語表」中の音価のことである。この音価は先に図表 2 として示した。『慶陵』本文の記述によるならば、『元朝秘史』・『韃靼館譯語』文例と、四哀冊文(興宗・仁懿皇后・道宗・宣懿皇后)の音節出現頻度および接尾語を見比べて契丹原字の音価を推定したとのことであるが¹²、どのような手順によって音価を導き出したかという具体的な記述は一切

¹² これらのうち『韃靼館譯語』の語彙と文例については山崎 1951 と山崎 1952 に、宣懿皇后哀冊については長田 1951 に音節出現頻度表が見えており我々はそれを利用することができるが、それ以外については公表されておらず全貌を知ることはできない。ただし、「接尾語表」の作成の経緯をみると比較的短日月で仕上げられており、興宗・仁懿皇后・道宗哀冊文については、長田 1951 の宣懿皇后哀冊文の音節出現頻度表のように整理されたかたちで頻度表が作られていた

無い。したがって『慶陵』本文の音価推定法が有効であるのか否かということも検証のしようがない。ただし、中世蒙古語と契丹語が同一の言語であると仮に定めて作業をすることであるならば、あるいは上記の方法によって、契丹小字で表記された接尾語の一部につきその音価を推定することは可能であるかもしれない。しかしながら仮にそのようにして音価を推定したとしても、契丹語を「中世蒙古語の一方言」と想定するという程度の段階では、得られた推定音価をそのまま受け入れることはできない。

このような音価につき、『慶陵』本文中の「第四節 契丹文字の哀冊」は「すでに數十個の契丹原字の音価を推定することができた。」と表明するわけであるが、この論調は「接尾語表」とはいささか異なるようである。「接尾語表」(1)右下の説明につきのようにある。

なお表末に参考のため附記した契丹字接尾語の音値は、中世蒙古語との比較によつて比定した形態論上の音値である。

ここでいう「形態論上の音値」の意味するところを理解するのは難しいけれども、全体として仮に定めた音価とのニュアンスのあることは認めてよいであろう。音節の出現頻度についても言及されていない。私は「接尾語表」即ち小林・山崎・長田 1953 の説明が音価推定者の本意に近いと考えている¹³。いずれにしても「中世蒙古語」との比較によつたとする部分は『慶陵』本文中の「第四節 契丹文字の哀冊」と同様であるから、先ずは中世蒙古語の文法成分と比較する必要があるだろう。「接尾語表」には接尾語の機能についての記述はないが、幸いにも先に確認したように、原字 140 については属格語尾と想定していたことが明らかであるから、属格語尾としての音価 ni がどのように付されたかを中世蒙古語との比較を含めて検討し、それを突破口として、音価の推定がどのように行われたかということについて考えてみる。

6. 属格語尾の音価推定

まず『元朝秘史』および『韃靼館譯語』(甲種本華夷訳語)の属格語尾をみると概略次のとおりである¹⁴。当該の資料は中世蒙古語を漢字で音訳したものである

- ①母音で終わる語幹には「因」を付す。
- ②-n で終わる語幹には「訥」を付す。語幹の-n と属格語尾を合わせて「訥」で表記する

と想像するのは困難である。『元朝秘史』について、当時参照できたものは他に服部 1946 がある。これには漢字使用の多寡に関する簡単な情報が盛り込まれた音訳漢字の一覧表が付されている。現在では我々は『元朝秘史』全巻にわたるローマ字転写をコンピュータ処理した栗林・确精 2001 を参照することができる。

¹³ 推定音価に対する態度において、『慶陵』本文即ち田村・小林 1953 と小林・山崎・長田 1953 とは相違する部分があると私は考えるのであるが、このようなことは複数の研究者による研究を総合した場合には起こり得ることである。

¹⁴ 栗林・确精 2001 および栗林 2003 を利用した。

場合と、語幹の-n を重複させて-n+「訥」と表記する場合がある。

③-n 以外の子音(-c)で終わる語幹には「c+un」の音を持つ音訳漢字を付す。たとえば、「l+un」倫、「m+un」門、「d+un」敦など。

これは伝統的な蒙古文語と同様で、①-yin、②-u、③-un、の三種の属格語尾が語幹末音の異なりに従って付されたものである¹⁵。なお語幹の母音にしたがって語尾が表記し分けられること、すなわち母音調和による音訳漢字の使い分けはない。ウイグル式蒙古字蒙古語碑文およびパスパ字蒙古語碑文も蒙古文語と同様である¹⁶。以上が中世蒙古語の状況であり、このような中世蒙古語と比較した結果として契丹語属格語尾を ni と推定したとは考えられない。前掲の中世蒙古語文献以外に何らかの根拠を探さなければならず、私は次に述べる二つの事項を音価推定の根拠としたものとする。

一つ目。道宗哀冊文および宣懿皇后哀冊文の三原字 334・140・144 に漢語の「哀」が対応する。そこで村山 1951 はダグール語(達斡爾語)の「死者をしのびてなく、哀悼の意を表わす」という動詞形より推定した名詞 qanin の属格形 qaniny を想定し、334(qa)・140(ni)・144(ny)と当てた¹⁷。なお ny は口蓋化子音であり、ñ とも表記される。この議論が認められるか否かは別として、ここで示された音価は「接尾語表」の音価と似ている。村山 1951 が 334(qa)・140(ni)・144(ny)としたところを、「接尾語表」は 334(ku)、140(ni)、144(ñ)とする。140 と 144 に付した音価は等しいわけであるが、その内 144 を口蓋化子音とする特殊な表記が同一となる点をどのように理解したらよいか。「接尾語表」が村山 1951 によったと解して初めて腑に落ちるのではなからうか。また 334 につき、両文献ともに喉音の子音を想定しているところも一致する。なおこの三つの原字の音価について清格爾泰等 1985 は 334(k)、140(ən)、144(ta)とし、144(ta)については後に訂正し清格爾泰 2002 では 144(ən)

¹⁵ 小沢 1997 には次のようにある。「(1)の-yin, (2)の-u², (3)の-un²が《〜の》を意味する属格語尾で、-yin は母音に、-u²は-n で終る語幹に、-un²は-n 以外の子音に終る語幹に、それぞれ接尾される。」(34 頁)。

¹⁶ ウイグル式蒙古字蒙古語碑文は中村・松川 1993 の資料による。パスパ字蒙古語碑文は Poppe 1957 による。37 頁には次のようにある。

“The forms of the genitive do not differ from the corresponding forms in Written Mongolian: the suffixes are the same, viz. -yin, -un, -u, and are used according to the same rules as in Written Mongolian.

The only thing that attracts attention is the gemination of final n of the stem in the form *qa·annu* emperor (gen.), found once at X III 11. It is perhaps not out of place to mention here that this same gemination occurs consistently throughout the *Yüan-ch’ao-pi-shi* (*Secret History*), e. g., *h ahan no* Khan (gen.) *Batacih an no* Batachikhan (gen.); *Barh udai mergen no* Bargudai Mergen (gen.); and so on.”

語幹が-n で終わる場合、『元朝秘史』と同様に、-n を重複させて-nu とすることがあるという。漢字音訳蒙古語の子音重複表記の問題については斎藤 2003 の 53-104 頁に興味深い論考がある。

¹⁷ 村山 1951 の 63 頁による。

とするから、村山 1951 と「接尾語表」(小林・山崎・長田 1953)の音価は後の研究から見てもほぼ正鵠を得たものといえる。それはともかくとして、私は 140 の音価 ni の出所の一つを村山 1951 の 140(ni)とみたいのである。

二つ目。『慶陵』本文中の「第四節 契丹文字の哀冊」によると契丹語の性格につき、次のようにある。

【白鳥庫吉】博士は遼史、契丹國志、遼史拾遺などの中國資料のうちから比較的確實と思われる契丹語を抽出し、これらを現在のアジア北方民族の諸語と比較した結果、その若干は蒙古語で、他の一部はツングース語で解きうることを證した。したがって契丹語から推測すると、契丹民族は蒙古語とツングース族との混合した民族であるべきことを論じ、また契丹民族を、今日蒙古族とツングース族との雜種とみとめられている、ダフル人の祖先に該當するものであろうと推測した。なおポッペ教授の研究によれば、ダフル語は、いわゆる中世蒙古諸方言と大差なく、いわば蒙古語の古形をとどめる一方言であることが明らかにされている。いま白鳥博士とポッペ氏との研究を併せ考えると、第六として、契丹語は一應中世蒙古語の系統に屬するものと考えられる。(263-264 頁)

また「接尾語表」の著者の一人である長田夏樹氏の長田 1951 には次のようにある。

以上の少ない資料によつて、不完全ながら知り得た契丹語は、語頭に P を有する点、母音の音価等の点に於て、蒙古文語とは明確に異なる特徴を示してはゐるがモンゴル語派に帰属してゐることは否定出来ない。多くの点に於て契丹語はダフル語、モンゴル語特に後者に近似してゐるやうに考へられる。しかしそれは他に多少の根拠はあるが直観的にそう感ぜられるだけであつて科学的な証明は契丹文字が完全に解読された後を待たなければならない。(54 頁)

以上の記述によると関係諸氏の間には、契丹語はダグール語(ダフル語。達斡爾語)¹⁸あるいはモンゴル語(土族語)に近似しているとの認識があったことがわかる。それが諸氏に共通した認識であったとも限らないが念のために両言語の属格語尾を確認しなければならない。最近の言語調査記録によると次のようである。仲素純 1982 によるとダグール語(達斡爾語)は属格と対格が同形で-ii/-jii であり、照那斯圖 1981 によるとモンゴル語(土族語)は属格と対格が同形で-na である。モンゴル語(土族語)の音形が、契丹語「接尾語表」の属格語尾 ni に近いようであるがなお隔たりがある。そこで、当時(1940 年代から 1950 年代)利用された可能性のある資料として A. de. Smedt-A. Mostaert 1945 によりモンゴル語(土族語)をみると次のようである。

¹⁸ 契丹語がダグール語(ダフル語)に近似するという説は、早くは白鳥 1910-1913 にみえる。

属格は接尾辞-ni であらわされる。(蒙古文語にあっては、属格の接尾辞はnの後で-u, -ü、他の子音の後で-un, -ün、母音の後で-yinとなる)。名詞がnで終わる場合、その子音は重複されない。接尾辞-ni は、時に-nに短縮される¹⁹。(15頁)

A. de. Smedt-A. Mostaert1945の属格語尾は、照那斯圖1981のモンゴル語(土族語)の-nəとは異なり、-ni となっている。そして時に-nに短縮されるという²⁰。なお対格も照那斯圖1981の記述と同様に属格と同形である²¹。このA. de. Smedt-A. Mostaert1945という文献は、長田1952に引用されているものであり、「接尾語表」執筆当時、参照し得る状態にあったことは確実である。また先に紹介したことであるが、長田氏は長田1951において契丹語はモンゴル語(土族語)に近似していると述べている。この発言内容は長田氏独特の見方である。以上によるならば、音価推定について「接尾語表」の説明は「中世蒙古語との比較によって比定した」とするが、実際には中世蒙古語の直接的な資料である『元朝秘史』や『韃靼館譯語』文例によったのではなく、A. de. Smedt-A. Mostaert1945のモンゴル語(土族語)の音声によった部分があると理解することができる。

以上を要するに、「接尾語表」の著者は、契丹語の属格語尾の音価を推定するに際して、村山1951に示された原字140の推定音価およびモンゴル語(土族語)の属格語尾の音の両者を参照して音価niを付したと想定し得るということである。この点について、かつて契丹文字研究小組1977は「接尾語表」に示された推定音価を評して「原字の出現位置・出現頻度に対する研究、附加成分の使用情況に対する研究は、疑いもなく一定の参考価値を具えているが、しかし単にこの種の研究の結果にたよるだけでは、特定の原字の具体的音価を確定するのは大変むずかしい。上に列記した契丹語接尾語の音価の比定の中には少数のいくつか実際の音価に近いものもあるが、統計の結果というよりは、やはり言語材料の対比の結果といった方がよいであろう。」²²とした。まことに的を射た評である。

¹⁹ “Il se forme au moyen du suffixe *-ni*. (En mongol écrit, les suffixes du génitif sont: *-u*, *-ü* après *n*; *-un*, *-ün* après les autres consonnes; *-yin* après les voyelles). Lorsque le substantif se termine par *n*, cette consonne ne se redouble pas (Phon. § 49). Le suffixe *-ni* est parfois réduit à *-n*.” (15頁)

²⁰ 照那斯圖1981とA. de. Smedt-A. Mostaert1945との相違は問題となる。方言の相違であるのか、同一方言の新派と旧派のような歴史的な推移を反映するものか、そのいずれかであろう。短縮形(弱化)の-nと照那斯圖1981の-nəとは何らかの係わりがあるのかもしれない。いずれにしても、このような問題はすでに解決済であるのかもしれないが寡聞にして知らない。

²¹ “L'accusatif se forme au moyen du suffixe *-ni* qui est phonétiquement identique au suffixe du génitif. (Les suffixes de l'accusatif en mongol écrit sont: *-yi* après les voyelles, *-i* après les consonnes). Comme pour le génitif, lorsque le substantif se termine par *n*, cette consonne ne se redouble pas; le suffixe peut aussi se réduire à *n* ou même tomber.” (21頁)

²² 「長田夏樹等人對於原字出現位置、出現頻率的研究，對於附加成分使用情況的研究，無疑具有一定的參考價值，但是單憑這種研究的結果是很難確定某個原字的具体音值的。以上所列契丹語

7. おわりに

考古学の小林行雄氏、蒙古語学の山崎忠氏、契丹・女真語および広く一般言語学に通じた長田夏樹氏の名を冠した「接尾語表」が公にされてより五十八年になるが、これまでこの表にそれほど光があたることはなかったように見える。表についての詳しい説明を欠いているため評価の対象になりにくかったということであるかもしれない。本稿は、このような「接尾語表」を、契丹文字解読史の中に位置付け、さらにはこの表より新たな価値を見いだすべく作業を始めた。その作業は緒に就いたばかりであるが幾つかの観点を得たので注で述べたことも含めて文頭に列挙した。

以上を要するに、『慶陵』本文は、『元朝秘史』『韃靼館譯語』（甲種本華夷訳語）文例と四哀册文（興宗・仁懿皇后・道宗・宣懿皇后）の音節出現頻度及び接尾語を見比べて契丹原字の音価を推定したとするが、実際には契丹語と漢語の対音対訳資料やダグール語（達斡爾語）やモンゴル語（土族語）によって音価を付したとみなし得る部分がある。そうであるならば、今後「接尾語表」を検討するばあい、『元朝秘史』及び『韃靼館譯語』（甲種本華夷訳語）を利用することは当然のこととして、契丹語と漢語の対音対訳資料やダグール語（達斡爾語）やモンゴル語（土族語）などの資料を含めて総合的に進めていかなければならないということである。

〈参考文献（発行年順）〉

- 白鳥庫吉 1898. 「契丹女真西夏文字考」, 『史學雜誌』第九編第十一・十二号。『白鳥庫吉全集 第五卷 塞外民族史研究 下』（岩波書店、1970年）所収, 45-68頁。
- 白鳥庫吉 1910-1913. 「東胡民族考」, 『史學雜誌』21-24編。『白鳥庫吉全集 第四卷 塞外民族史研究 上』（東京：岩波書店 1970年, 63-320頁）所収による。
- 厲鼎燿 1932. 「熱河契丹國書碑考」, 『國學季刊』第3卷4号, 563-572頁。
- A. de. Smedt et A. Mostaert. 1945. *Le Dialecte Monguor, II^e partie: Grammaire*, Peking. (1964, Uralic and Altaic Series, Indiana University).
- 服部四郎 1946. 『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』東京：文求堂。
- 山崎 忠 1951. 「甲種本華夷譯語の音訳漢字の研究 一語彙の部一」, 『天理大學學報』第五輯, 55-80頁。
- 村山七郎 1951. 「契丹字解読の方法」, 『言語研究』第17・18号, 47-70頁。

後綴擬音中有少数幾個接近實際音值的, 與其說是統計的結果, 還不如說是對比語言材料的結果。」(22頁)。訳文は長田 1984による。

- 田村実造 1951. 「契丹文字の発見から解読まで —村山七郎「契丹文字解読の方法」を読む—」, 『民族学研究』第16巻第1号(1951.8), 46-48頁。
- 長田夏樹 1951. 「契丹文字解読の可能性 —村山七郎氏の論文を読み—」, 『神戸外大論叢』第2巻第4号, 40-66頁。
- 長田夏樹 1952. 「Mongolo-Turcica—アルタイ比較言語学序説」, 『Azia Gengo Kenkyu』第1号, 59-80頁。『長田夏樹先生追悼集』(長田夏樹先生追悼集刊行会編 2011)に転載されたものによる。
- 山崎 忠 1952. 「いわゆる甲種本華夷譯語の音譯漢字の研究 —文例の部—」, 『遊牧民族の社會と文化』(ユーラシア學會編集、自然史學會発行)輯, 87-111頁。
- 田村實造・小林行雄 1952-53. 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に関する考古學的調査報告』(上巻本文冊、下巻圖版冊)京都大學文學部 座右寶刊行会。上巻は1953年、下巻は1952年発行。
- 小林行雄・山崎忠・長田夏樹 1953. 「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)(2)」, 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に関する考古學的調査報告』(上巻本文冊)田村實造・小林行雄著, 京都大學文學部 座右寶刊行会。
- Poppe, N. 1957. *The Mongolian Monuments in Hp'ags-pa Script*, Second Edition translated and edited by J. R. Krueger, Wiesbaden.
- 中国社会科学院民族研究所・内蒙古大学蒙古語文研究室契丹文字研究小組 1977. 「關於契丹小字研究」, 『内蒙古大学学报』1977年第4期契丹小字研究專号。
- 照那斯圖 1981. 『中国少数民族語言簡誌叢書 土族語簡誌』北京: 民族出版社。
- 仲素純 1982. 『中国少数民族語言簡誌叢書 達斡爾語簡誌』北京: 民族出版社。
- 長田夏樹 1984. 「契丹語解読方法論序説」, 『内陸アジア言語の研究 I』神戸市外国語大学, 1-49頁。
- 清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985. 『契丹小字研究』北京: 中国社会科学出版社。
- 王弘力 1986. 「契丹小古墓誌研究」, 『民族語文』1986年第4期, 56-70頁。
- 中村 淳・松川 節 1993. 「新発見の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」, 『内陸アジア言語の研究 VIII』(中央ユーラシア学研究会), 1-92頁, 写真資料8枚。
- 長田夏樹 1994. 「契丹文字の結んだ縁」, 『小林行雄先生追悼録』京都大学文学部考古学研究室編, 天山舎発行, 96-98頁。『長田夏樹先生追悼集』(長田夏樹先生追悼集刊行会編 2011, 264-265頁. 好文出版)に収録。
- 小沢重男 1997. 『蒙古語文語文法講義』東京: 大学書林。
- 長田夏樹 2000. 『長田夏樹論述集(上) 近代漢語の成立と胡漢複合文化—鞞鞞鞞鞞・遊仙窟・唐詩・扶桑槿域・宋詞・西夏の言語とその基層文化—』京都: ナカニシヤ出版。
- 長田夏樹 2001. 『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真

- 碑文积・民俗言語学試論・邪馬台国の言語—』京都：ナカニシヤ出版。
- 栗林 均・确精扎布 2001. 『『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』仙台：東北大学東北アジア研究センター。
- 清格爾泰 2002. 『契丹小字釋読問題』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 斎藤純男 2003. 『中期モンゴル語の文字と音声』京都：松香堂。
- 栗林 均 2003. 『『華夷訳語（甲種本）』モンゴル語全単語・語尾索引』仙台：東北大学東北アジア研究センター。
- 吳英喆 2007. 「契丹小字中の“元音附加法”」, 『民族語文』2007年第4期, 40-51頁。
- 長田夏樹先生追悼集刊行会(長田礼子 長田俊樹 遠藤光暁 竹越孝 太田斎 橋本貴子)編 2011. 『長田夏樹先生追悼集』東京：好文出版。
- 坪井清足 2011. 「長田夏樹さんの日本語源流を求めて」, 『長田夏樹先生追悼集』(長田夏樹先生追悼集刊行会編 2011. 好文出版), 279頁。
- 長田礼子 2011. 「長田夏樹年譜」, 『長田夏樹先生追悼集』(長田夏樹先生追悼集刊行会編 2011. 好文出版), 343-360頁。
- 吉池孝一 2010. 「“契丹大小字”諸説」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館)第94号, 17-20頁。
- 吉池孝一 2011. 「長田夏樹氏と契丹小字研究」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館)第98号, 13-20頁。